

---

# 雪のように

紀本 真利亜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪のように

### 【Nコード】

N3216D

### 【作者名】

紀本 真利亜

### 【あらすじ】

母親になった有希が子供と一緒に故郷の札幌に2年ぶりに帰郷する。しかし、その土地には過去の切ない思い出が残っていた。少しずつ甦る記憶。そして過去の儚い恋。若かりしの恋で大人になっていく有希の物語。

## 過去の出会い

2007年 12月23日 PM15:15

飛行機から見える、私の故郷はただ真つ白な塊。  
私は1才になる娘と共に故郷に帰るのだ。

夫の転勤の為、故郷を離れ栃木県に移り住んで早二年。  
この二年間、一度も帰郷していない。

とにかく生活していくだけで精一杯で、子供も産まれたから尚更。  
結婚して生活していくって事が大変な事なんだと実感させられた二年間でもある。

今、住んでいる栃木の街は12月でもなかなか雪が降らない。

（早く実家に帰りたいなあ）

真つ白な塊を見ているとなんだかすごく懐かしい気持ちになってきた……

娘の礼は大人しくスヤスヤ寝ている。可愛いものだ。

私の母も礼に逢うのを大変楽しみにしてる。

なんせ初顔合わせだから当然と言えば当然。

昨晚、母と電話で話したが、会話の話題は常に娘の礼の事だった。  
顔は私似なのか夫似なのか、夜泣きはするのかとか、その対処の仕方等……

母が母親としては先輩なのだから有り難くその助言を参考にすること

とにした。

子育てと家事等で忙しくなかなか母と連絡も取れずにいたので結局長電話に

なってしまうた。だが心とします時を久々に得られた時でもあった。最後に

「明日はお母さんが空港まで迎えにいくから」と、母は言い電話を切った。

母は私よりも礼の方に会いたいに違いない。きっとそうだ。そうに違いない。

ちよつと母に嫉妬しつつ、空から故郷の北海道を見つめながら昨晚の電話の会話を思い出していた。

「まもなくこの機は新千歳空港に着陸いたします。尚、新千歳空港の天候は晴れ・・・」

機内アナウンスがながれ、揺れの回数も少し増えてきた。

程なくして無事空港に着き、娘を胸に抱え、トロリーバックを引きながらロビーへと向かった。

ロビーに着き、まず搭乗受付側にある時計が目に入った。

P M 1 5 : 4 6

さつそく、母を探す為、携帯電話に電源を入れ電話を掛けた。

「もしもし？お母さん？有希<sup>ユキ</sup>だけど。今着いたよ。どこら辺にいるの？」

「有希？もう着いたの？！」

「うん。もう着いた。いまどこ？」

「今ね、ロビーの真ん中辺りでお茶してたよ。」

「そうなんだ、じゃ近くだから今向かうね。」

中央に目を向けると以外に早く母を見つけることが出来た。  
母も周りをキョロキョロしながら探している様子だ。

母の背面から近づいて、

「お母さんっ！」

少し大きな声で話し掛けた。

母はすぐにこちらを見て私と目が合った。

しかし、母の目線はすぐさま私の胸の方へ視線を落としたのがわかった。

娘の礼を見つけたのだ。

私に近寄り、寝ている礼の顔を母は覗き込んだ。

「良かったねえ！有希似で！安心したわあ」

「そう？似てる？」

「似てる、似てる、おばあちゃんだよ。」

ニコニコしながら声を少し張り上げた。

母が寝ている礼に話掛けてるのを見ると何だか嬉しくなってきた。

（北海道に帰ってきて良かった）

素直にそう思えることが出来たのだ。

間もなくして母は私のトロリーバックを手に取り

「さあ、家に帰ろうか。あそこの通路から行けば駐車場近いから」と言い、飲みかけのお茶をそのままにして私を車まで案内してくれた。

出口に向かう通路に入るとロビーより気温が下がってるのがわかった。

一歩一歩進むに連れ気温が下がる。

（もう少し、暖かい格好にしてあげればよかったな）

と、礼に顔を向けたが相変わらず寝ている。

エスカレーターを降り、外に出た。

一面真っ白な世界。

この二年間、体が北海道の冬の寒さを忘れていたようだ。ただ寒い  
の一言。

とてもこの地に住んだとは思えなかった。

黙ってても鼻から入る冷えた空気が肺を刺し、ただでさえ目が冴える。タバコの煙の様に

鼻と口から白い吐息がでる。

しかし、頭の中ではこの環境が懐かしい気分になっているのがわかった。

母が駐車場の清算を終え清算所から出てきた。

「車すぐそこだから早く乗ろう」

ニコニコしながら車の有る方に指をさす。我が家の長年使ってた車、ボロボロの軽自動車が本当にすぐそこにあつた。

良くこんな近くに駐車できたなと思いながら後部座席のドアを開けた。

すると、そこにはチャイルドシートが装備されていた。母の方を向

くと、

今度はニンマリしながら

「お父さんが買って昨日着けたんだよ。早く礼ちゃんを乗せなさい。風邪引くよ!」

母は喋りながらハッチを開け、私のバッグを積んだ。

「お母さん、お土産も入っているから雑に積まないでね!」  
礼を乗せ後部座席のドアをゆっくり閉め、助手席に乗った。

「お土産有るの?何?」

運転席に乗ってきた母は興味深々な様子。

「餃子だよ。」

「餃子?」

と言いながらエンジンを掛けた。

「そ、宇都宮は餃子が有名なの。味はまあまあだよ。」

「北海道の食べ物に比べれば本州の食べ物は不味いからね」

母は自慢げに言う。

「高速で帰るの?下の道?」

餃子から話題を変える為聞いてみた。

「下で帰るよ。今4時だから丁度いいよね。」

「丁度いいの?高速のほうが早いじゃなかあ。」

辺りはさつきよりも薄暗くなってきた。母は車のライトを付けゆっくり車を動かした。

「今ね、札幌でイルミネーションやってるよ。今からだったら6時前には大通りに着くでしょ。ね、丁度いいでしょ?」

「そうか、イルミネーションやってるんだ。久々だなあ。見たい!今日は天気も良いから綺麗に見えるよね!」

「でしょ?!」

また母は自慢げに鼻で笑う。

「そういえば旦那は仕事で忙しいの?」

「忙しいみたいだよ。だから子供と二人で帰ってきたでしょ。」  
私はそう返した。

「いつまでこっちにいるんだっけ？」

「帰りたくなったらかえるよ、予定では1月10日位かな。」

「巧くやってるの？」

母は痛い所を突いてくる。

「正直微妙かな。」

窓に目を移す。外はもう日が落ちて真っ暗。

「出来ちゃった結婚だったからねえ、今頃旦那のイヤな所とか見え  
てきたんでしょ？」

「うん。」

「子供ももういるんだから夫婦仲良くしないといけないよ。あと、  
お母さんとお父さんは有希の旦那さんちよつと苦手だから今回来な  
くてホッとしたわ。」

「ははっ。」

私は苦笑いをし、また外に目をやった。北広島市に入ったみたいだ。  
「あと30分位かな。有希、ゆつくり休んでいきなよ。こっちに友  
達沢山いるんだから。」

「うん、もちろんゆつくりしていくよ。孫の面倒宜しくお願いしま  
す。」

札幌市街に入り、見覚えのある場所が次々と現れてきた。

（宇都宮と全然違うなあ）

私は何気に今住んでる街と比べていた。

「あつ、その交差点を曲がれば大通りだよ。」

私は咄嗟に声が出た。

「そうだったけ？。良く覚えてるね。有希が乗ってて良かったわ。迷  
うところだった。」

呑気な事を言いながら母はウインカーを出しゆつくり交差点を曲が  
った。



そこにはまるで宝石を散りばめた様な幻想的な世界が目に入ってきた。

夜の背景に雪で覆われた白い地面と木々。それを照らす様々な色の光。

何度見ても綺麗な光景。毎年形を変える白と黒と光の世界。見る者を癒す世界。

## 札幌イルミネーション

大通りを母はゆっくり走る。きっと礼に見せたかったのだろう。残念ながら礼はまだ寝ている。本当に良く寝る子だ。母の走る車の後ろは軽く渋滞している。そのおかげでこの綺麗な光景をゆっくり見ることができた。

長椅子に座る若い男女二人。手を繋ぎながら歩く高校生カップル。幸せそうな光景が次々目に入ってくる。車から見えた世界を放心状態に近い感じで眺めていた。

私にもこんな時期があったんだ。

気づけば昔を少し思い出していた……

6年前 -

2001年 12月24日 PM 21:33

クリスマス イヴ

当時、私は某電気店の販売をしていた。

「有希！やつと仕事終わったね。」

同期の香織<sup>カオリ</sup>が疲れた顔つきで話しかけてきた。

香織とは高校からの友達で私の一番の友達だった。

「やつと終わったよ」。クリスマスイヴなのに仕事とか本当に有り得ないよね！」

眉間に皺を寄せながら香織に返した。

「じゃ、今日は飲み会やる！イヴだし！有希の家で酒盛りしよう。」

「いいねえ！しょつか！帰りにコンビニでお酒買って帰ろう。」

右手で缶ビールを飲むかのような仕草をしながら香織にウィンクした。

私は高卒でこの会社に入社しすぐに一人暮らし始めていたので香織と良く二人で酒盛りをしていた。

更衣室で私服に着替え会社を後にした。

気温が寒いせいか、星空がやけに綺麗に見えた。

「星、綺麗だね！」

香織の方をみた。

香織は寒いのか、首を短くさせながら

「そう？うわぁ、寒いよお。」

どうでもいいのか香織に軽く流され、会社の近くのコンビニへダッシュしだした。

「ちよつ、ちよつとまつてよ!!」

私は走る香織を追いかけた。

コンビニに入ると

「あゝ、暖かいねえ、有希。」

と肩で息をしながら私に香織は言う。

「いきなり走ることはないでしょ、近いのにさあ。」

私は迷惑そうに言った。

「若いんだから気にしない、気にしない。さっ、お酒買おう!」

と一人お酒コーナーに向かう香織。

まあ、いつもの事と思いつつ私は雑誌コーナーへ向かった。

雑誌を物色していると私の携帯が鳴り始めた。

ポケットから携帯を取り出し液晶を見た。

ヤマシタカズヨシ

山下一良と表示されていた。

「あつ、山下さんだ。」

独り言の様に呟き、電話に出る。

「はい、もしもし?」

「おう、黒田!今何してた?!」

テンションの高い男からの電話だった。

山下は元同僚で一ヶ月前に違う店舗に転勤してとにかく元気で強引な四歳年上の男だ。

「別に何もしてないですよ。これから香織と二人で酒盛りします。」

「酒飲むの?!おまえら未成年だろ?!」

「そんな関係ないですよ。」

「おいおい、まあ酒なんてどうでもいいけどよ。お前に男紹介してやる。」

「ええ??別にいらなですよ!なんですか?!いきなり?!」

「イヴの日に女二人で酒盛りは無いよ!?!今から向かうから場所ド

「コ？」

「会社近くのコンビニにいますけど。」

「じゃ、15分で着くから待ってるよ！イルミネーション見に行くから」

「マジですかっ??！」

「おう、マジだ！着いたらまた電話するからな！お前ら帰るなよ！じゃあな。」

そう言つて山下は電話を強引に切った。

「はあ。」

ため息が一つ出た。

「どうしたの？誰と話してたの？」

香織が心配そうに聞いてきた。

「山下から電話きた。今からイルミネーション見に行くぞつて。」

香織は目を大きくして

「ええっ???！二人で!??」

「違うよ、男紹介してくれるつて、私に。」

「相変わらず強引な奴だね、山下さんは。私帰ろつかな。」

何気に逃げようとする香織に

「ダメだよ、お前らつて言つてから。らっ！て、香織もだよ。」

「最悪だあ。私、缶チューハイ一本買つてくる。酒でも飲まないとおのテンションに付いていけないから。有希も飲む？」

「はい、是非頂きます。カシオレで。」

香織は再び酒コーナーに向かった。

私は正直男運が無かった。今まで三人と付き合つたことが有つたがどれも長続きしなかったのである。前の男も半年前に別れたばかり

だ。別に今は男が欲しかった訳でもなかった。ので正直迷惑だった。ちなみに香織も同じ時期に別れていた。

「はい、カシオレ。」

香織は店内で袋から買った缶チューハイを取り出し私に渡した。

「ありがと。寒いけどコンビニの外で飲もうか。」

「そうだね。」

二人でコンビニから出てゴミ箱の前に座り込んだ。

「酒を飲めば楽しくなるよ。」

「そうだ、意外とカッコイイ人が来るかも！」

と言いつつ乾杯した。

「イヤ、カッコイイ奴は来ないよ。山下の友達だもん。」

いきなり香織は渋い顔をして毒をはいた。

「ははっ！だよねえ。忘れてた。」

私はお酒があまり強くなかった。ので缶チューハイ1杯で軽く火照ってきた。

「顔、赤いよお有希。いいね、1杯で酔えて」

赤い顔をした香織が言う。

香織もお酒は強くなかった。

すると、コンビニの小さな駐車場に一台の軽自動車が入ってきた。

「あつ、来た。」

軽自動車は車を止め、運転席から山下が降りてきた。

「おう、早く乗れ。」

山下は運転席のシートを前に出し、運転席から乗るよう指示する。

2ドアのハッチバックだから仕方ない。

「お疲れ様です。」

私と香織は山下に一応挨拶しながら私から車に乗った。

助手席には男の人が座っていた。私はその男の後ろに座った。顔とかは全然見えなかった。

香織も車に乗り込み私の隣に座り、最後に山下が運転席に戻った。車内は暖房が効いていて暖かった。

「イヴなのに女二人で遊んでるのやばいぞ?!」  
ドアを閉めながら山下は絡んでくる。

「山下さんも男二人で遊んでるんでしょ?」

香織はすぐに反発した。

「そうそう、こいつ竹中<sup>タケナカ</sup>って言うから。」

山下はさりげなく助手席の男を紹介した。

「こんばんは。竹中です。」

香織の方を見て挨拶した。

「あつ、こんばんは山本香織です。」

香織が自己紹介した。そこには仕事をしている時の礼儀正しい香織の顔があった。

「黒田有希です。」

私も自己紹介した。竹中と名乗る男は私の前に座っていたので香織に喋り掛けた時の横顔を一瞬しか見えなかった。

「じゃ、イルミネーション見に行くか」

山下は車を運転しだした。

私の職場は豊平区だったので大通りまで車で10分位で着くことが出来る。

「二人は良く遊んでるんですか？」

香織は問いかける。

「おう、良く遊ぶよ。」

山下は運転しながら答える。

「彼女いないんですか？二人とも。」

香織の質問は続く、

「俺は永遠のアイドルだから女は作くらねえよ。」

意味不明な返答をする山下。

「彼女いたらその子と一緒にいるよ。イブだし。」

竹中は前を見ながらドリンクホルダーに置いてあった飲みかけの力シスオレンジに口を付ける。

「カシオレ好きなの？！有希と同じだね。」

私の方を見る香織。

「へえ、カシオレ好きなの？カシオレ好きな奴に悪い奴はいないよ。」

「と言い、またカシスオレンジを口にする。」

「美味しいですよカシオレ。」

初めて私から竹中に話しかけた。

「美味しいよね。俺缶チューハイしか飲めないんだ。酒弱いし。あつ、次の交差点曲がると大通りだ。近くにどつか止める場所あるかなあ？」

竹中は山下に道を教える。

「わかったよ。車なんてその辺に止めればいいじゃん。」

交差点を曲がると綺麗な光景が見えた。

「チョー綺麗だね。」

竹中は山下に言う。

「そうか？車ドコに止めようかな、あそこでいいかな！」  
と、山下は裏路地に向かい路駐し、エンジンを切った。

竹中は車から降り、助手席のシートを前にだし、

「狭くない？降りれる？」

私を気遣ってくれた。

その時、初めて竹中と目が合った。

綺麗な色の茶髪。整った目と鼻。お酒に酔っているのか顔は少し赤かった。私好みの可愛い系の顔だった。

「大丈夫です。降りれます。」

私ちよつと照れながら車から降り、竹中の横に立った。

いい香りがした。

（香水何付けてるんですか？）

と聞きたかったのだが、緊張してか聞けずにいた。

運転席からも香織が出てきた。

「じゃ、行こうか。」

山下が大通りへと足を向ける。

雪が少し降ってきた。ちよつと大きな目の牡丹雪。

「あつ、信号が点滅している！」

山下が走って横断歩道を渡る。香織もそれに続いた。

信号が赤に変わった。

私と竹中は渡れずにいた。

向こう側では山下達が大通り公園の中に入っていく。きつと私達も一緒に渡って着いて来ていると思っていたのだろう。



「渡れなかったね。てゅーかあいつ等、先に行っちゃったよ。」  
私に喋り掛ける。

「うん、行っちゃったね。」

信号が青に変わり歩き始めた。

「やっぱり、クリスマスはすごい込んでいるね。あいつ等探すの間掛かりそうだ、面倒くせえ。」

竹中は周りを見渡した。

周りはカップルだらけ。皆、このイルミネーションを見に来たのだろう。

（周りから見れば私達も付き合ってるように見えるのかな？）  
会って30分位の竹中に私はそんな事を考えていた。

信号を渡り、私達も大通り公園に入った。

「竹中さんて何歳ですか？名前は何て言うんですか？」  
歩きながら唐突に私は質問した。

「名前？勇ユウだよ。竹中勇。22歳です。」

美しく光に覆われた木々を見ながら答え、携帯を取り出し時間を確認した。

（ユウって言うんだあ、いい名前だね。）

「今10時ちよい過ぎだから、後2時間で23歳になります。」  
竹中は続けて喋った。

「明日、誕生日なんですか？」

「そうだよ。年は取りたくないね。明日仕事？」  
（23歳に見えない、私とタメ位にしか見えない）

そう思いながら

「仕事です。」

と答えた。

「大変だね、俺は明日休みだよ。ねえ、あそこに座らない？」

誰も座っていない長椅子を見つければ二人で座ることにした。

「ユキちゃんだっけ？字どう書くの？今降っている雪と同じ字？」  
足を組みながら私を見る。

「希望の有る子って書いて有希です。」

「いい名前だね！」

ありきたりの返答だったが、初めて竹中の笑顔を見た。笑うと口元からチラリと八重歯が見えた。

「俺ね、雪が好きなんだ。有希ちゃんじゃないよ。この空から降ってくる雪。」

竹中は手のひらを広げると、雪が手のひらに落ちる。

「どうして？」

私は訊ねた。

「なんか夢いでしょ。」

「夢い？」

私も手のひらを広げてみた。すると雪が手のひらに落ちすぐ解けた。  
「だってすぐ消えちゃうんだよ？雪は」と優しい目で私を見る。

「それは自然な事でしょ？雪なんだもん。」

「雪を人に譬えたら夢いよ。もしかしたら俺だけかもそう考えるの。酒飲みすぎてるのかなあ？」

と竹中はタバコを取り出しに火をつけた。

「譬えてみて。」

私は不思議な考え方をする竹中に興味を持った。

「そう？頭悪いと思わない？」

「思わないよ。」

「じゃ、簡単に人じゃなく恋愛で譬えるよ。雪を好きな人としよう。」

雪の形が有るうちは巧くいつてる。でも雪はいつか解けてしまふよね？解けると失恋。形有るもののいつか消えるって事。」

「へえ。」

私はまた手のひらを広げてみた。

「雪が解けると最後冷たいよね？でも段々と冷たさが無くなってくるでしょ？それは思い出とか振られた時の悲しい気持ちとかで譬えると、最初はショックだけど時間が経てば立ち直り、思い出は時間が経てば色褪せてく。永遠は無いつて事。どう？儂くない？」

と恥ずかしそうに竹中はタバコを横の灰皿に捨て、

「変な話しっちゃったね。」

と竹中は両手をポケットに突っ込んで夜空を見上げた。

私は妙に納得してしまった。

「と言うことは永遠なんてモノは無いんだ。なんか寂しいね。でも思い出とかは色褪せていかないと思うけどな。」

「そうなれば良いんだけどね。」

竹中はまだ夜空を見ていた。

私も真似て夜空を見上げた。

私はこの時から竹中の事を好きになっていた。もしかしたら車から降り、目の合った瞬間から一目惚れしていたのだろう……

車の窓から見た光景から私は当時の思い出に耽っていた。気づくと大通りも抜け、石狩街道に入る直前だった。

「お母さん、コンビニ寄ろう。ちょっと喉渴いちゃった。」

母は何かを悟ったのか、優しい声で、

「いいよ。あそこでいい?」

ホテルの一階に入ってるコンビニに立ち寄った。

「すぐ戻るから。お母さん何かいる?」

首を振る母を見て、私はコンビニに入り、すぐ車に戻った。

「何買ったの?」

「カシスオレンジ。久々に飲みたくなったの。」

「しばらくじゃないの? お酒飲むなんて。昔、誰かさんと良く飲んだよね。二人ともお酒弱いくせに。」

ジロリと見てくる母。

「うん、三年振り位。お酒飲むの。」

やはり感じてる母。追い打ち掛けるように、

「ほれ、あそこ有希が3ヶ月入院してた病院だよ。」

「もう! いつから気づいてたの? もう思い出させないで!」

カシオレの口を開け、二口飲む。

「だって有希、大通りでお母さん何回話しかけても返事しないのさ、寝てるのかな? って、

有希を見ても起きてるし、目が遠くを見てたから。なんとなく、ね。で、カシスオレンジでピンと来たんだよ。」

流石は女の勘。

「もう、五年も経つのか。時が経つの早い早い。入院してた時の有希もユウちゃんも若かったからね。」

母も竹中の事を思い出してるみたい。私は確かにあの病院で3ヶ月入院していた。

2002年 2月2日 AM 07:03

私は20歳になっていた。

朝7時、私は目を覚ました。隣ではユウ君（竹中）がスヤスヤ寝ている。

（かわいい。）

とても寝顔が可愛い。この寝顔は私だけの物だ。  
こんな事を毎朝思っていた。

私とユウ君は付き合うことになった。クリスマスイブのあの日に結ばれてしまったのだ。

付き合った日は12月25日。クリスマス&ユウ君の誕生日。  
その日以来、私は竹中の事をユウ君と呼ぶようになった。そして、今は毎日一緒にいる。

私の友達からは良く、『ユウ君に利用されてるだけだよ。』とか、『都合のいい女だね。』、とか悪く言われたが私は気にしなかった。

私が好きならそれで良い。ユウ君は遊びのつもりでも今の私が幸せなら全然良い。その位惚れていたのだ。

私の日課は朝7時に起きてユウ君のお弁当と朝食を作ることから始まる。料理は得意ではなかったがユウ君の為なら出来たのだ。それと手紙を書く事。手紙はきつと捨ててるだろうと思うけど今の所毎日渡している。。

でも今日でしばらくお弁当も手紙も渡せなくなる。  
私が入院するからだ。

仕事中、たまたま重い電化製品を持った時に腰を壊してしまったのだ。会社も今日からしばらく休むことになった。

7：30分

私はユウ君を起こす。

「朝だよ、起きて。」

「……おはよう。」

寝癖だらけの髪の毛がまた愛らしい。寝起きが良い事も私的にポイントが高かった。

今までの付き合った男は寝起きが悪かったからだ。

ユウ君はシャワーを浴びに行く。

朝食は毎日トーストと目玉焼きと牛乳。たまにベーコン入り。

私はこれしか作れなかった。だが文句も言わず毎日食べてくれる。お弁当もレンジでチンで出来るもの。これも毎日残さず食べてくれた。

シャワーを終え、小さな食卓につく。

「頂きます。」

トーストに噛り付くユウ君。

「今日何時に病院いくの？」

「ん？12時だよ。会えなくなるから寂しい？」

私はどんな返答がくるか期待した。

「もちろん寂しいよ。お見舞いとか誰かくるの？」

期待通りの返事が来て思わずニヤケル。

「お母さんが毎日来てくれるよ。で、その間、この部屋に住むよ。」

「やつぱり？じゃ、俺実家に帰らないとね。」

すべて食べ終え、牛乳を飲みながら続けた、

「俺も仕事終わったら出来るだけ毎日お見舞いに行くからね。」

予想外の発言に嬉しくなる私。

付き合ってまだ1ヶ月と少しだったので正直不安だったのだ。入院している間に浮気しちゃうのではないか、この恋愛は終わってしまう

うのではないかと。

「本当っ?!」

思わず大きな声を出してしまった。

「じゃ、毎日手紙書くよ!!お母さんにも言っとくから!」

「お母さんには言わなくて良いんじゃない?」

「いや、言っとくから!」

一度、ユウ君と母は会っていた。

私の成人式の時だ。

私はユウ君を私の実家に連れてったのだ。その時のユウ君は母に対してすごく愛想良く接していたので大変好評だったのだ。母はすぐに『ユウちゃん』と馴れなれしく下の名前で呼ぶ様になり、有希には勿体無いと口にしていた。帰り際にも、

「この子（有希）はすごい我がままだからだから付き合っのすごい大変だよ。おかげで男と付き合ってもすぐ別れちゃうんだ。」

と言わなくて良いことをユウ君に吹き込み、

「また遊びにおいでよ、ユウちゃん。」

好印象を持った母は優しく見送っていたのだ。

仕事に行く時間になりユウ君は着替え、玄関に向かう。私は後を追  
い、

「暇なときはメール頂戴よ!絶対だよ!」

と我がままをを毎日言う。そして、キスをする。良く言えばラブラ  
ブなカップル。悪く言えばただのバカップルだ。

「いつてきます。」

ユウ君は笑顔を見せる。

「いつてらっしゃい。」

私は右手で小さく手を振り見送る。ドアが閉まっても私は余韻に浸

ってか私はそこに少しの間いるのだ。

ユウ君の口元から八重歯が見える笑顔が愛しくて堪らなく好きで、少しでも離れるのがイヤだった。一步間違えればストーカーに成っていたかも知れない。

少しの間ユウ君の事を考え、私は入院の準備をし、母を待った。

AM 11:36

入院の準備も終え、ユウ君と一緒に撮ったプリクラを鑑賞していた。私は付き合うことになってからプリクラを事有る度にユウ君と撮っていたのである。私自身、プリクラが好きだったのだ。そして、まだ少ない思い出を思い出していた。

『ブルブルッ』

私の携帯がテーブルの上で振動した。一瞬、ユウ君からメールが来たと思い、急いで携帯を開く。鼻から溜め息が出る。母からのメールだったのだ。メールの内容は今家の前に着いたから荷物をもって早く降りて来るようにとの事だった。

（いよいよ来たか、入院するのやだな．．）

と思いながら大事なプリクラ、手紙を書くための可愛い便箋とお気に入りのペンを鞆に入れ家を出た。

（しばらくこの家にも帰れないんだなあ）

と気を落としながらドアの鍵を閉めワザとゆっくりアパートの階段を降りる。そして母の車に乗った。

「早く降りてきなさいよ！ノロノロと！この子はまったく。」  
ちよっと怒りながら車を出す母。

「だって入院したくないんだもん。」



口を尖がらせながら私は子供みたいに言う。

「無い言ってるの、入院して手術しないと治らないんだよ？我慢しなさい。」

「わかってるよ。はい、これ家の鍵。」

センターコンソールに鍵を置く。

「あまり部屋いじらないでよ。」

「はいはい。」

「ユウちゃんはお見舞い来るの？」

「もちろん来るよ！」

私は得意げに母の方を見てやった。

「あら、意外と巧くいつてるんだね。」

「当然だよ。」

母とくだらない話をしている間に病院に着いた。そして、入院の続きをし病室に入る。4人部屋だった。私以外はみんな年配の女性。私は軽く挨拶をした。

「黒田有希です。今日からお世話になります。」

こんな挨拶で良いのかと思いながらお辞儀をした。すると私のベットの隣のお婆ちゃんが、

「ゆっくりしていきなさいな。これ食べなさい。」

とミカンを私にくれた。

（ゆっくりしたくないよ。早く退院したいのですよ私は！！）

なんて心のなかで叫び、

「頂きます。ありがとう。」

と作り笑いしミカンを頂いた。

少しすると母が病室に現れ、先ほど私が挨拶したお婆ちゃん達に頭を下げ家から持ってきただろうミカンを配り始めた。

（ミカンはさつき私がお婆ちゃんから貰ったよ、隣のお婆ちゃんは間に合ってるのに。）

その母の行動がとても滑稽で笑いを堪えるのに必死だった。  
配り終えた母が私のベットに近づいてきた。

「何ニヤニヤしてるの？」

「何もだよ。」

「変な子だね。この子は。」

P M 18:45

「もう時間だから帰るね、また明日来るから」  
母はそう言い帰宅の準備を仕出した。

この病院の面会時間は七時までだった。しかし時間外面会と言う物が有り、七時から九時まで特別に面会が出来るらしい。その気になれば母も九時まで居ることが可能なのだ。だが、時間外の面会はユウ君との時間と決めていた私は、

（早く帰れ帰れ）

心にも無いことを思いながら母を見送った。

ユウ君には時間外面会のことはすでにメールで伝えている。後は逢いに来てくれるのを待つだけであった。

ユウ君からメールが来た。今仕事が終わったみたいだ。私は待つている間に手紙を書くことにした。手紙の内容はユウ君の事がこれ位好きだよとか、今日有った事とか、手術するのが怖いとか、そして、ユウ君との今後の将来についてがほとんどだった。

P M 20:22

愛しのユウ君が病室にやっと現れた。同室のお婆ちゃん連中はもう寝ているみたい。

ユウ君はベットをカーテンで仕切り、隣のパイプ椅子に座る。

「ごめんね、遅くなって。」

同室の人を気遣って小さな声で話し掛ける。

「来てくれて有難う。」

私はベットの上で座りながら向かい合うユウ君の手を握った。

私は好きな人との一時の時間を堪能する。ただ、時間が経つのがあまりにも早い。もう九時五分前だ。

「もう行くね。」

ユウ君は帰ろうとした。

「ねえ、ユウ君は神様を信じる？」

突拍子の無い質問を投げかけた。

「えっ？神様？？信じないよ。」

「なんで？信じないの？」

「いるわけ無いじゃん、存在したら世の中常に平和だよ。」

現実的な答えだ。

「ちえっ、詰まんないのお。」

ちよつとふくれた私。気分を害した私を見てか、キスをしてくれた。

「また、明日もくるからね。」

いつもの笑顔を見せる。私はもうニコニコだった。手紙を渡しユウ君を見送った。

それからユウ君は毎日お見舞いに来てくれた。ユウ君の実家とは真反対のこの病院に時間を掛け仕事帰りに来てくれるのである。休みの日は朝九時から夜の九時まで。疲れを惜しまず。いつの間にか看護婦の間にも評判になっていた。そして、母にユウ君の事を毎日自慢していたのだ。

「ユウちゃんと出会ってから有希は変わったね。」

母はミカンの皮を剥きながら私に言う。

「そう？変わったかな？」

「毎日楽しそうに見えるよ。」

「毎日楽しいよ。毎日お見舞いに来てくれるし。毎日会って話せるから。」

ユウ君に感謝しながら母に答えた。

「毎日お見舞いに来る事は難しい事なんだよ。本当に感謝しなきゃならないね。良い彼氏だよ。」

母はユウ君を褒める。

もしユウ君が居なかったら病院嫌いの私は入院することは無かっただろう。ましてや手術、体に傷がつく事が嫌いな私なら言い切れる。ユウ君が入院することを薦めたおかげなのだ。

この時の怪我はほっておくと最悪、歩行困難になる可能性があった。だから今でもユウ君に感謝している。

今日もまたユウ君が会いに来てくれた。

「明日手術だよ。気分はどう？」

「おっかないよ。」

情けない声で返事をする。

「大丈夫だよ！すぐに終わるから、心配しないの！」励ましてくれる優しい彼氏に安堵からか涙が出る泣き虫な私。

「すぐ泣かないの。手術なんて怖くないよ！」

手術が怖くて泣いてると思ってるのだろう。

「うん、わかった。」

私は笑みを作りだす。

「明日は必ずお見舞いに来てよね。」

「当たり前だよ！」

「明日の今頃の有希は麻酔で寝てるかも知れないよ、会いに来てくれるのわからないかもだけど来てくれる？」

「心配しないの。必ず来るから。」

いつもの笑顔を見せてくれる。

最近仕事が忙しいせいか、病院に来る時間が少し遅くなっていた。

この日は限られた時間で楽しい話を沢山してくれた。

手術当日、私は朝から緊張していた。やはり手術は怖い。恐怖からかユウ君の帰った昨日の夜から帰って疲れているだろうユウ君にメ

ールをしていた。時間を気にせずにワガママな事をする私。だが送るたびに励ましのメールが届く。

そして、手術の時間が来た。

それ以降の記憶は無い。気が付いたのは翌日の午後だった。

## 相思相愛

翌日、腰に走る鈍痛で目が覚めた。  
ベットの横にある小さな棚の上の小さな時計に目をやった。

A M 13:16

まだ麻酔が効いているのか体があまり言うことを利かなかった。  
すると母が病室に雑誌を持って入ってきた。きっと売店で買ってきたのだろう。私の足元のベットの端に雑誌を広げ、ミカンを頬張り始めた。

全く私が起きたのを気づいていない様子だ。

「お母さん」

小さな声で話しかけた。これ以上大きな声が出なかったのである。  
母と目が合う。

「あつ、気が付いたんだ。調子はどう？」

手術の翌日である。調子が良い訳ない。

「腰が痛い。」

顔を顰めて呟いた。

「それもそうだ、ゆっくり寝なさい。」

なんとも他人事のように母は笑った。

そして私はしばらくまた眠りに着いた。

次に目覚めたのはその日の夜だった。

母の姿は既に無く、隣のお婆ちゃんのテレビの音が聞こえてきた。  
テレビの声の内容が私も良く観ていたテレビとわかったのだ。

いの時間の把握が出来た。

間もなく看護婦さんが私の元に来て

「容態はどう？」

と言いながら私の腰から出てる管とその先にある袋らしき物を何やらいじりだしたのだ。

私はそれが排尿の管とはまだ知らなかったのである。

「昨日も彼氏お見舞いに来てましたよ。」

テキパキ動きながら私に言う。

「え！？本当ですか？」

「着てたよ、でも来るのは遅かったよ。仕事終わるの遅かったんだねきつと。」

「全然気づかなかった私。」

「気づかないよ、麻酔で寝てるんだもん。八時五十五分位だったかな、時間ギリギリだったよ。」

優しい笑みで看護婦は私を見て続けた。

「何かね、オドオドしてたよ、人差し指で有希さんの手チョンチョン触ってた。きつとすごい心配してたんだね。超優しい彼氏だよ、羨ましいな。」

「指でチョンチョン触っただけですか？！」

私はすぐさま想像し笑ってしまった。

「きつと、どうしたら良いのか解らなかったんだね。正直、滑稽だった。私ちよつと見てたんだよカーテンも開いてたし、毎日来てるからさ。可愛い彼氏だね。」

「でも五分位しかいなかったんですよ、仕事急がしかったんだ。」

その時、私は勇君の優しさが本物である事が解ったのだ。自然と（手術して良かった）なんて

他愛のない事も思い始めたのである。

「私もあんな可愛くて優しい彼氏が欲しいな。」

看護婦はきつと素直な気持ちの言葉を残し病室から出て行った。カーテンで仕切られた簡易的な部屋で一人、神様に感謝した。

神様、ユウ君に出会わせてくれてありがとう。

神様に感謝したからかユウ君が現れた。

「あれ？もう起きてるの？腰大丈夫？」

何となくすごい久しぶりに聞いた声だった。実際は二日ぶりなのだが安心できる柔らかい声。

「昨日、来てくれたんでしょ？看護婦さんから聞いたよ。」

「そうなの？いつも同じ仕事着で着てるから覚えられたのかな？」  
いつもの笑顔が私の腰の痛さを忘れさす。

「昨日の私どうだった？」

「どうもこうもないよ！すごい弱ってた。死にそうな感じだったよ！」

「死にそうだったの？！」

だから人差し指でチョンチョン触ってたのか。思わず看護婦さんの話を思い出しその時想像したのと同じ想像をまたしたのだ。

「でも、仕事終わるの遅くてさ、間に合わないと思った。車ですごい飛ばしたんだ。着いたの九時位だったもん。」

面会時間内に間に合うか間に合わないか位際どくても迷わず病院に向かってくれた事がすごい嬉しかった。

勝手な解釈だが少しでも迷いがあればきつと間に合わなかったのではないかと私はそう思ったのだ。

「間に合いそうになかったら別にお見舞い来なくてもいいんだよ。事故に有ったら大変だから！道路とかツルツルでしょ！」

ユウ君に対する精一杯の気遣いの言葉をかけた。



「大丈夫だよ。運転には自信有るから事故ら無いよ。」

根拠の無い返事が返ってきた。

「とにかくいつ何時でも安全運転で――！」

「はいはい、わかりました。安全運転心掛けます。」

病院内に消灯を告げるアナウンスが流れる。九時になった事を告げる。

「じゃ、もう九時だから安全運転で帰るね。」

「わかったよ。気をつけてね。」

そしていつもの様に別れのキスをしユウ君をベッドから見送る。

姿が見えなくなるとまた腰に鈍痛が走ってきた。

この日解った事。私とユウ君が相思相愛である事。たった五分間の面会があつた事実で私はそう感じたのである。

一週間後からリハビリが始まった。もちろんこの一週間もお見舞いには欠かさず来てくれた。

リハビリと言ってもほとんどマッサージに近かった。それと体力回復のため病院内をうろつく事だった。

ある日、香織がお見舞いに来た。

「お久さあー、ケーキ買ってきたよ。」

相変わらずの顔である。

「元氣してた？」

私は久しぶりの友人の訪問に感激した。

「調子はどうさ？」

「調子？まだ少し腰痛むけど段々良くなって来たよ。」

「体の事じゃなくて彼氏の事だよ――！」

なにやらイヤらしい顔つきで私を睨む。

「別に普通だよ。」

「本当？この前浮気調査も兼ねて山下に探りの電話したよ。聞いた  
い？」

私が入院している間にユウ君が浮気していないかわざわざ気を使っ  
て調査してくれたとの事である。私思いの優しい友人だ。

私は毎日会っていたので浮気なんてしていないのは解っていたのだ  
が友人の折角の調査を水の泡にしたくはなかったのでとりあえず神  
妙な顔付をし話を聞く事にした。

「で、どうだったの？」

「それがさ、毎日有希のお見舞いに行ってるって言うのさ。なんか  
胡散臭くない？毎日だよ？山下が言うから尚更信憑性に欠けるんだ  
よね。」

山下の言うことは本当に信憑性に欠けるのだ。全部嘘に聞こえる。  
きつと本性は良い人だと思っただが日頃の行いが悪いからなのだ。  
ユウ君曰く、山下は良い奴との事。だから私は本性は良い人と私は  
思う事にしてる。実際、山下の言うとおり毎日ユウ君はお見舞いに  
来ているので正論なのだ。

「そんな事言ってたんだ。」

「そう、いくらなんでも毎日は無理があるよ。毎日なんて来てない  
でしょ？」

心配そうに疑問系で聞いてくる。

私は驚きを隠せない表情を見せ、香織の顔色を伺った。香織をカラ  
カウ事にした。

私の顔を見るや否や（やっぱり）という顔をし

「男なんて皆その程度なのよ！結局最後に泣くのはいつも女なのさ  
！」

語尾を粗上げて続けた、

「入院してる事を良い事に・・・」

香織のテンションも下がってきた。

きつと以前の私と同様に香織も男運が悪かったのでユウ君もその程度の男と思ったのだろう。イヤ、山下の友人と言うのが一番のネックだったのかも知れない。『山下の友人「山下」と言う方程式が香織の頭には成り立っていたのかも知れない。これ以上、ユウ君の事を悪く思われるのが嫌なのと香織をカラカウのが悪い気がしてきたので種明かしをすることにした。

「大丈夫だよ！ユウ君は毎日お見舞いに来てくれますよーだ！」  
私はアツカンベーの顔で香織に言い放った。

「は？マジで？！何じゃそれ。」

哑然とする香織に顔がたまらず可笑しかった。

「そんな男いるの？！」

「いるよ、ユウ君がそんな男だよ。」

「山下の奴、私に恥搔かせやがって。」

山下は全く悪くはないのだがそこは山下の人柄。そんな役だ。

「いいなあ有希は。優しい彼氏がいて。今回は本物か。」

溜め息を一つ吐く香織は何とも寂しげに見えた。

「ユウ君はダメだからね！」

一応念を押しとく事にした。

「竹中君はもうダメだよ。だって毎日お見舞いに来るくらいでしょ？私なんかにもう振り向かないでしょ。」

（おいおい、まさか狙ってたの？！）

そして、自分で買ってきたケーキに手を付け始めた。

「香織にも必ず良い人見つかるよ！」

寂しくケーキを食べる香織が可愛そうに見えてきたので応援した。

「本当？！じゃ、退院したら紹介してよ！」

と冗談ぽく言い私にチョコレートケーキを紙皿に移し渡してくれた。  
「ここのケーキ超美味しいんだよ。」

いつもの香織の顔に戻ったので安心した。

「六個買ってきたから二個ずつ食べよう。残りの二個は優しい有希の彼氏様にあげよう。」

「ごめん香織、ユウ君甘いものダメなんだ。」

「えっ?! ケーキ食べれない人この世にいるの!?!」

信じられないと言う表情を見せ、

「じゃ、一人三個だね!」

甘いものに目の無い私と香織は意図も簡単に三個のケーキを平らげたのである。

コルセットを腰に巻いているのでさっき食べたケーキ三個でお腹が膨れてキツかった。早く消化させるため、散歩と食後のリハビリを兼ねて香織と病院内をうろつく事にした。

「退院する日は決まったの? 店の人皆心配してるよ。」

「予定では3月9日かな。」

「日にちまで決まってるんだ、順調なんだね。」

「そうだよ。その日はお父さんも来るんだ。楽しみなのさ。」

どうしてって顔を香織はした。

「ユウ君とお父さん初めて会ったよ? ユウ君もお父さんも退院する日は休み取るみたいだから舞い違いなく会うよね。」

「なかなかの策士だね有希は。」

「策士じゃないよ。成るべき事が成るだけだよ。」

「有希のお父さん怖そうな顔してるからね。その日私も来ようかな。」

「

「お父さんは怖くないよ! 優しいよ! あと香織はその日来なくて良し。お父さんとユウ君の初対面邪魔しそうだから。」

「ええ?!? しないよ?!?」

なんて話をしばらく続けたのである。

いつもの香織との会話を久しぶりに堪能しながら病院内を二人で徘徊

徊した。

一番の友人がお見舞いに来てくれた事を心の中で感謝しながら。

## ズルイ顔

2007 12月23日 PM 19:52

私は約二年振りに実家に帰宅した。

見慣れた玄関に、靴箱、靴箱の上にある水槽、その中の熱帯魚、階段、そしてこの匂い。全てあの時と同じだった。

「ただいまっ！」

私は学生時代の時のような声で我が実家に帰宅の合図を送った。学生時代と比べての違いは礼がいる事と私が少し老けた事くらいだろう。

居間のドアから父が出迎えに来た。

「おおっ、ご苦労さん、お帰り。元気にしてたか！」

人相の悪い父もニヤニヤしながら私に声をかけた。

私は父に礼を抱っこさせる為、無理やり父の腕にあずけた。

「おおっ、かわいいなあ、小さい頃の有希にそっくりだな！」

両親揃って孫馬鹿なのである。

一生懸命、礼を不器用にあやす父がとても可愛らしく見えた。父が子をあやすのを初めて目撃したのでとても印象的だったのだ。

「きやつ、きやつ」と笑う礼も、父の事がお爺ちゃんとかわかったのだろうか。

母も車から私の荷物を持って玄関に入ってきた。

「さ、有希、早く上がりなさい。」

と言った母が、目覚めている礼に気づく、

「あれえ?! 起きたの?!」

母は父から礼を取り上げあやし始めた。

「小さい頃の有希に本当にそっくりだね！」

両親揃って同じ言葉を発する。

居間に入ると本当に何も変わっていない。

私は小さい時からいつも座っていたソファ―に腰掛け、大きくノビをした。

母親から娘に戻った瞬間だったのかもしれない。

母は礼を抱きながら父に飲み物を出すように指示した。

父は冷蔵庫からウーロン茶を出してきた。

「有希、顔が赤いぞ？風邪か？」

顔を心配した父が言う。

「違うのよ、お酒飲んだのよ。車の中で。ねえー！礼ちゃん！」

母が礼の顔を見ながら父に返した。

「酒？！有希飲むんだっけか？」

父は首をかしげた。

「よく飲んだ、でしょ！ユウ君、と！」

礼を高い高いをしながら語尾だけを微妙に強くしながら答えた。丁度、高い高いの一番力のいる所と語尾が重なった為だ。

「ああ！ユウとか！あれ酒だったのか！ジュースだと思ってたわ。」

一人で勘違いしていた父は、ユウ君と二人で飲んだカシオレの缶がジュースの缶だと思っていたらしい。父はビールと日本酒しか飲まなかったのでカクテルの存在を知らなかったのである。

「何ならコンビニまで歩いて買ってくるか？そのジュース。飲むのか？」

普段なら絶対に買いには行かない父が珍しく気を使う。私が実家に久しぶりに帰ってきたのが嬉しかったのか、孫の礼に会えたのが余程嬉しいのか解らないが、父のこの行動は今まであまり見たことの無い光景だった。

「大丈夫だよ。ウーロン茶で。お父さんはお酒でも飲んでて。」

私は父のその行動が嬉しかった。

それと父の口から『ユウ』と言う名前が自然に出てきたのが私の心に何かを走らした。

私の両親がユウ君という私の元彼を覚えていてくれた事が何より嬉しかったのかもしれない。

私は札幌に帰郷するという事が当時のユウ君との思い出に浸ってしまうのがわかっていた事だ。そして、私はそれを覚悟していた。それほどこの土地にはユウ君との思い出が沢山ありすぎたのである。

私はユウ君との思い出に自然とまた浸っていったのであった。

2002年 3月 9日 AM 8:11

今日は私の待ちに待った退院日。前日の夜はソワソワしてなかなか寝付けなかった。それでも朝の目覚めは早く六時には目を覚ましていた。しかし、天候は朝から生憎の吹雪。

私は病室で身支度をしていた。

（この病室とも今日でお別れか。あつ、それとこの病室内のお婆ちゃん達とも。）

挨拶でもしなければと思い、

「今日で退院する事になりました。今までお世話になりました。」と軽く挨拶をした。お婆ちゃん達は何やら良かった、良かった話し始めた。

すると、

私のカバンのポケットから携帯の振動音が聞こえてきた。母からと



思いメールを見る。

案の定、母からで吹雪のため道路が渋滞している為、病院に着くのが少し遅れるという内容だった。ちよつとガツカリしてしまった。早く病院という隔離された場所から開放されたいと願っていたのだ。この吹雪だとユウ君も来るの遅いのかな？と心配していると、また携帯が振動した。

（あつ、ユウ君からだ！）

急いで携帯を広げ、受信内容を確認した。内容は以外にももうすぐ病院に着くみたい。

（ちよつと早くない？！またスピード出してきたのかな？！どんな運転してるんだ？！）

あまりにも私が予想していたユウ君の到着予定時間よりも一時間も早かったので要らぬ心配をしてしまったのだ。

そして、私は病院の玄関までユウ君を出迎えに行つたのだ。病院の1Fの受付ロビーは外来の患者、付き添いの人で朝から賑わっていた。自動ドアが開くたびに外の冷気がロビー内に吹き込んでくる。

私は自動ドアの近くにある柱に立つたまま軽く寄りかかりユウ君を待つ事にした。

外は真つ白と言うか吹雪と地吹雪のせいで灰色に近く何も見えない。少し遠くから人が来ると濃い灰色のシルエツトになり自動ドアの前に来ると初めてどんな人が来たか分かる程度だった。

私は今日久しぶりにユウ君の車の助手席に乗るのがすごい楽しみだった。運転している姿が好きだったのである。ユウ君の車はマニュアルでシフトチェンジする時の手の仕草と運転中の真剣な顔をしている時の横顔が特にお気に入りだった。只、ユウ君の車は車高が低いみたいで腰の悪い今の私には少々酷かもしれない。私の予想では、ユウ君は私の次に車が好きだと思う。香織が昔言っていた事を思い出した。車と財布を大事にする男は彼女を大事にすると。まさしくユウ君の事だと思いニヤケル。どれだけユウ君の事が好きなのか私

は。全くあきれてしまう。

それともう一つ楽しみがある。昨日、お見舞いに来た時に私は手紙を渡したのだ。その返答が楽しみであったのだ。

外から一際大きな音のする車が入ってくるのが音で解った。私はそれがユウ君の車だと私はすぐに理解した。ユウ君の車のエンジンは珍しいみたいで音が他の車と違うので解りやすかった。車種は忘れただがスポーツカーっぽい。

ちよつとして自動ドアからユウ君が入ってきた。ユウ君はすぐに私を見つけた。

「ここにいたの？寒くなかった？」

相変わらずのいつもの甘い香水の匂いが私の鼻を伝う。

「全然寒くないよ！」

私は満面の笑顔で答えた。

「何そんなに喜んでるの??」

「何もだよ！早く病室戻ろう！」

私はユウ君の左腕に無理やり自分の右腕を絡ませ歩く。これからユウ君と一緒に帰れると思うと自然と笑顔になっていたのである。

「あれ？まだお母さん達来てないの？」

「ちよつと遅れるみたい。吹雪のせいで。誰かさんは早く来たのにな！」

何かを察知したのかユウ君はあわてて

「飛ばしてないよ！朝の七時くらいに家出たんだよ！」

「本当?!」

私はユウ君の目を見て嘘じゃない事を確信してから

「なら宜しい。」

と答え、腕にギュツと力を入れた。

病室に入るとユウ君はソワソワしだす。きつとお父さんに会うのが怖いのだろう。そのソワソワしているのが可笑しかったので少しの

間見ていたのである。

「何、ソワソワしてるの？怖いんでしょ？」  
たまらず声をかけた。

「怖くないよ！」

その表情は明らかに強がりの顔だった。

「ちょっとタバコ吸ってくるから」

ユウ君は早歩きで病室から出て行ったのである。

ちよつとしてお母さんからメールが来た。あと五分位で病院に着くみたい。私はもうすぐ訪れるであろう、ユウ君とお父さんの対面に一人胸を躍らしていたのである。

この時の私の顔はきつとズルイ顔になっていたに違いない。

## 初対面

AM 8:22

「おまたせえ。吹雪が凄くて車が全く動かなかったの。」

母が病室に少し頭と肩に雪をのせて入ってきた。

私はやっと来たかという顔をして

「もう、ユウ君きてるよ!」

と少しばかり野次つてやったのだ。

「ええ?!もう着てるの?早いね。どこにいるの?」

母は周りを軽く見渡した。

「今タバコ吸いに行ってるよ。あれ?お父さんは?」

「お父さんは下で退院の受付してるよ。もう少しで上がってくるよ」

「そっか、お父さんとユウ君ちゃんと話すかな?」

ちよっと何気に母に尋ねてみた。内心、私もちよっと心配だったのだ。

「どうだろうね、お父さんは人見知りするからねえ」

そうなのだ。父は人見知りをするのだ。人相が悪い上に人見知りだから大抵の人には機嫌が悪そうに見える。だから初対面の人は尚更、父には話しかけにくい。

「でもユウ君ならきつと大丈夫だよ!」

「そうね、愛嬌があるからね。ユウちゃんは」

母も笑顔でそう言った。その言葉に私は若干安心した。

「お母さん、ちよっとユウ君呼んでくるね!」

私は病室から出て少し離れた喫煙コーナーに向かった。

この通りなれた廊下も今日で最後となると少し寂しげに感じる。そしてこの病院にも『ユウ君との思い出』が出来たと一人そんな事を考えながら廊下を歩いた。

丁度、廊下の端にあるガラスで隔離された喫煙コーナーに着いた。ガラスの外越しから中の様子を伺った。ユウ君は一人だったのですねに見つかった。

何やら上を見上げ作れもしない煙の輪を作るのを試みているみたい。でも上手く出来ない様子。ユウ君は私の存在に気づき、「なあに？」って顔をしている。何処か幼いユウ君の顔がとても愛らしく私の母性本能をくすぐるのだ。本当にこの人は私より年上なのかさえ疑問に思うくらい。でも私より確かに全然大人。考え方とか言葉使いとか。そのギャップがとてもたまらなく感じてしまう。私の心はユウ君に完全に奪われている。

私は窓越しからユウ君に

「お父さん達きたよっ！」

って言ったのだ。きつと中からは私の声は聞こえない。ユウ君は私の口の動きで父達が来たのを悟り慌てて喫煙所から出てきたのだ。

「もう来たの?！」

もはやタバコの煙で輪を作っていた余裕すら感じられない。何のためにタバコを吸っていたのか。またソワソワしだした。

「もう病室にいるの?！」

「今はお母さんしかいないよ。お父さんは下で受付してるから」

「じゃ、今のうちに行こう！」

私は（ええ?!今のうち?!どのうち?!）と心の中で思い、おもわず嘖いてしまった。

「どうせお父さんには今日会ったよ。今のうちも無いよね？」

笑いながら優しくユウ君を見た。

「いいの！」

ソワソワしたユウ君はとても滑稽だ。今日初めて見た私の知らないユウ君のソワソワした態度。これからも私がまだ知らないユウ君の一面を私にだけ見せて欲しいと心の中で思いながら、私はまた腕を組みさつき一人で歩いた廊下を今度は二人で歩いて病室へ戻ったの

だ。

廊下から病室に父がいるのが見えた。するとユウ君はピタツと歩くの止め、

「あれがお父さん？」

病室にいる父を見ながら私に小声で問いかける。

「そうだよー」

私はユウ君の顔を見たがユウ君の視線は父にいつていた。私の顔は一切見ないで数秒動かなく固まっていた。きっとユウ君の頭の中では色々としミュレーションを行っているのだろう。私はユウ君が歩き出すまで待つ事にした。ユウ君のタイミングで会わせなかったから。私のせめてもの心遣い。

そして、意を決したのかユウ君は歩き出した。私は親譲りのニヤニヤした顔をして一緒に病室に入って行ったのだ。

「おはようございます」

ユウ君は母と父に挨拶をいつもより大きな声で発した。

父はユウ君の声に気づいてこちらを向いて、

「ああ、どうも」

軽くお辞儀をした。そして声は少し裏返っていた。結構フレンドリーな対応。

それを見た母は軽く笑ってしまい口元を手で覆って少し下を向きまた笑い始めた。

私的には全く予想外の展開だったのだ。予想では父は毅然とした態度でユウ君に接しそして距離を取りあまり喋らないだろうと思っていたのだ。それが会社のお客さんに会う様な感じで軽く会釈をし、声も少し裏返り調だったのだ。私は口をポツカリ開けてその数秒の出来事を見ていた。きっと父もユウ君に会うのを緊張をしていたのだろう。それもそうだ、娘の彼氏に初めて会うのだから緊張しても致し方の無い事なのかもしれない。

「初めまして竹中勇です。有希さんとはお付き合いさせて頂いてます」

ユウ君は深々と頭を下げ連ドラ並みの挨拶をした。私はその挨拶が可笑しくて母と二人で笑ってしまった。

「いやいや、こちらこそ有希がお世話になってます」

父はまたお辞儀をし、

「有希はワガママだから大変でしょう？」

いつかの母と同じ事を言う。全く両親は似るのだ。

「いやー、そんな事は、無いですよ」

ユウ君は少し考えて返した。

「何?! 何で少し考えたのー!？」

私はすかさずユウ君にフクレタ顔で言っっちゃった。

マズイと顔をしたユウ君は苦笑いをして誤魔化す。母だけが最初から笑っているのだった。

父もきつと母からユウ君の情報を聞いていたのだろう。時折、笑みを浮かべながらユウ君と話している。

私はその和んだ光景を見てひとまず安堵した。(良かった、仲良くなれて)と胸を撫で下ろしていた。

そして私の頭の中は次第に昨日ユウ君に渡した手紙の返答の事で気がかりになっていったのだった。

## 吹雪の中

「じゃ、そろそろ出ましようか？」

母が父に切り出した。

「そうだな」

父は私の荷物を持ち出した。荷物と言っても私の着替えが入ってるカバン一つだけだ。

「あ、僕が持ちますよ」

ユウ君はすかさず声を掛けた。

「イヤ、大丈夫。気にしないで良いから」

父はあっさり断り病室から出て行った。

「緊張してるんだよ、気にしないで良いからねユウちゃん」

母が父の気分を察してか空かさずフオローを入れた。私が入院していた時読んでいた雑誌と小説を紙袋に入れながらまた続けた。

「車の中からずっと緊張してたんだよ、お父さん」

「そうなの？」

私はやっぱりと思ったのだ。

「ずっと、ユウ君はどんな人なのか聞いてくるのさ、良い子だよって言うても聞いてくるからさ、もう面倒くさくなって会えば解るよ！って言うてやったのさ」

笑いながら段々と母の顔はズルイ顔になっていた。私は母のズルイ顔を見て（もしかして私、お母さんに似てない？）母にソックリかもと心に思い少し恥じんでしまった。

「少し話せたからホッと出来たと思うよ、お父さんは」

私は少し赤面しながらユウ君に言った。ユウ君の顔もホッとした顔になって、

「それオレが持ちますよ」

と、母が持とうとした雑誌を入れた紙袋を手を取った。

「じゃ、宜しくね」



母はニツコリしてユウ君にお願いをする。

「そつだ有希、実家に帰るの？有希の家にいくの？」

「え？」

私はキョトンとして何気にユウ君の方を向いた。ユウ君はまた「なあに」って顔をした。

「自分の家に帰るよ」

って言ってやったのだ。ユウ君にプレッシャーを掛けるためだ。

「そうなの？大丈夫？その腰で」

母は当然の心配をしてきた。てつきりしばらく実家に帰って来るものだと思っていたのだろう。私はユウ君と一緒にいたいから自分の家に帰ると言ってやったのだ。昨日渡した手紙の返答をまだユウ君から得ずに私から勝手に言ってしまった。手紙でユウ君に問いかけた事は二つ。一つは同棲を懇願していたのだ。そして私は母の前で強引に線を引いたのだった。本当にワガママな私。

「一人で大丈夫なの？！」

「大丈夫だよ！ユウ君がいるから！」

またユウ君の顔を見てやった。今度はちょっとビククリした顔をしていた。母も感づいてかユウ君の方を見ていた。やはり女の勘は鋭い。

「ユウちゃん、有希を宜しくね」

あっさり同棲を認めてしまった母。ユウ君に答えを求める母にユウ君は

「あ、はい大丈夫です」

ユウ君もそう言わざるを得なかったのかもしれない。

まずは一つ目の難題を私的にはクリアしたのだ。まだユウ君の本心を聞いてはいなかったのだが。

1階のロビーに着くと私の看護を良くしてくれた看護婦さんが遠目

に入ってきた。看護婦さんも気づいてくれて手を振りながら駆け足で私達に近寄ってきた。

「退院おめでとう！有希さんがいなくなると思うと何だか寂しいなあ」

と言いながらも顔は笑顔だった。

「有難う御座います」

私も笑顔で答えた。

「良い彼氏だね、羨ましい」

看護婦さんはユウ君の方を見たがユウ君はそれに気づかず何やら外の様子を伺っていた。外の天候が気になっていたのである。折角の看護婦さんのお褒めの言葉を聞き逃していたのだ。

そして、やっとユウ君は看護婦さんの存在に気づき軽く会釈をした。

「それじゃ、有希ちゃんお大事にね」

「はい、大事にします」

優しい看護婦さんは私にそう言って去ってしまった。

「それじゃ、有希、一回有希の家に寄ってからお母さん達帰るからね」

と言って母は父の車のある駐車場に向かう為、猛吹雪の外に消えていった。

「そうだ、ユウ君。面白い本を見つけたよ」

「そうなの？」

「この前、売店で買ったんだ。とっても感動するから読んでね」

ユウ君は意外と本を読むのが好きな方だった。ほとんど読むのは漫画本とかだけど小説もたまに読むのであった。ユウ君にも是非読んで欲しい本だったので買っておいだのだ。

「はいはい解りましたよ」

とっても素っ気無い返事が返ってきたので私は軽くユウ君の腕をチ

ネツてやった。が、筋肉質の右腕は利かなかったみたいだ。もう少し強くやってやれば良かったと思ひながら、

「読んだよ！」

と軽く声を大きくした。

「解ったよ。感動するんでしょ？泣く位？」

「私はもう涙ボロボロだったよ」

「え？！本当？」

少し驚いていた。私が本で泣くとは思ってもいなかったのだろう。それもそうだ。映画とか借りて一緒に見ても開始30分位で私は眠ってしまうのだ。なので活字の多い本は尚更読まないと思っていたのだろう。

「そろそろ帰るよ」

ユウ君は私に言ってきた。私は軽く頷きユウ君の左腕にすかさず自分の右腕を絡ませ家から持ってきておいたお気に入りの黒いC&A mp;Dのマフラーを顔と首に巻き寒さ対策に万全を喫したのだ。

そして外に出る為、約一ヶ月お世話になった病院を出る事にした。自動ドアが開くと想像していた寒さ以上の寒さが襲ってきた。久しぶりの外、しかも猛吹雪。か弱い私を弱らせるには十分だった。上下左右から容赦なく雪は襲ってくる。目も開けてられない。呼吸すらままならないのである。

私はユウ君の左腕を力一杯ギュツと右腕で絞めマフラーをより深く顔に多い身を出来る限り小さくしてジツと寒さに耐えていた。

「寒いよ、ユウ君」

「そうか？」

「寒い、死ぬ。死ぬ」

「馬鹿だネエ、有希は。人間は簡単には死なないよ」

「有希は寒さに弱いの！もうヤバイよ！」

「オレは大丈夫だよ」

「ユウ君がおかしいんだよ！！」

なんてクダラナイ話をしながら猛吹雪の中ユウ君の車がある駐車場に向かったのだ。

久々のユウ君の腕の感触、大好きな香水の香りが自然と私を安心にさせる。

外はとっても寒かったけどこの時の私の気持ちはとても暖かったのを覚えている。

## 吹雪の中 貳

駐車場は屋根付だった。何とか猛吹雪に耐えた私は体に付いた雪を軽く叩いて落とした。

「車はどこら辺に置いてるの？」

「あっちだよ」

駐車場はまだ病院が始まって間もないのにびっしり埋まっている。少し遠くにユウ君の白い車が見えた。

「あ、あつた！」

私は自然と駆け足になって車に駆け寄った。

「あつ、有希！走ると腰に悪いよ！」

ユウ君も駆け足になり私を追いかけたのである。

ユウ君の言うとおり確かに腰に痛みが走った。私は歩く事にしたのだ。

「痛かったんでしょ？」

ユウ君が優しく言ってきた。私は意味も無く口を尖がらせ得意の怒ったふりをしたのだ。本当に意味は無い。ただ、ユウ君の言ったとおりになるのが悔しかったただけなのだ。

「何怒ってんの？」

「怒ってないよ」

でも口は尖がらせたまま。ユウ君にとってはいつもの事なので軽く流してしまう。

「相変わらずだね、有希は」

ユウ君はキーレスで車の鍵を開けて助手席のドアを開けた。

「先に乗ってて。寒いけど」

「へいへい」

私は助手席に乗り込んだのだ。中は寒い。ホンの少し前まで走っていたのにもう車内は冷え込んでいる。そして、ユウ君はエンジンを

掛けてハッチに荷物を仕舞い運転席に乗ってきた。

「寒いね！」

「さっきまで寒くないとか言ってたのに車の中では寒いんだね！」  
と捻くつてやったのだ。

「寒い物は寒いの！」

ユウ君も言い放つ。

「そうかい、そうかい」

私は笑いながら二人の空間を味わっていた。

兎に角、何となく懐かしく感じる車の芳香剤。初めて乗った時を思い出してしまった。初めてのデートは小樽で映画を見に行ったのだ。当時、話題だった邦画で私は緊張しまくりだったのを覚えている。そして、観覧車を二人で乗り初めてキスをした事も思い出し一人二ヤついてしまっていた。

「何ニヤニヤしてるの？」

「いいの！」

私の思い出にふけっているのを邪魔をしたので軽く一括したのだ。

「あつ、ごめんなさい」

いつの間にか私の方が上に成っていた。

「そうだ！手紙の返事は？！」

私はユウ君に聞いてみた。一つは同棲の事でもう一つの返事を聞いてみたのだ。

「それは帰ってから話すよ」

「なあんだ。ケチ」

「ケチって何さ！ちゃんと話すから待ってなさい」

「はあい」

また口を尖がらせたのだった。相変わらずワンパターンの私。

「それじゃ、そろそろ出ますよ」

「安全運転でね！けが人が乗ってるんだから」

「はい解りましたよ。安心して乗ってくださいね」

車からは私のお気に入り音楽がかかってきた。それはバラードでとっても良い歌だ。今でもこの歌を聴くとユウ君の事やこの時を鮮明に思い出す。今の私にとっては忘れられない歌。そして、あまり聞きたくない聞けない歌なのだ。

「この歌良いよね？好きになったださ」

ユウ君は運転しながら私に言ってくる。

「でしょ？誰のお蔭？」

「有希さんです」

ユウ君は結構、音楽系には乏しいのである。この歌が流行ったのは当時より4年位前の歌だったのである。

「詩が最高だね」

私はメロディーが好きだった。詩の内容は二の次である。

「私の事も抱きしめたくなる？」

唐突にこの歌の内容と同じ事を聞いてみたのだ。

「教えないよ」

「なんだよ。ケチ！」

またまた口を尖がらせたのであった。

駐車場から出ると外はまだ吹雪いていたのである。本当に先が全く見えない。私なら運転できない状況だ。

「見えるの？」

「ん？見えないよ」

なんて当たり前のような返事をしてきたのだ。

「ちよつと、大丈夫なの？」

「大丈夫だよ」

何を根拠に言ってるのか解らなかった。ただ、万が一事故が起きてもユウ君と一緒に良いとそんな浅はかな事を思っていたのも覚え

ている。

私はただ黙って吹雪のせいで何も見えない前とたまにユウ君の横顔を見ていた。そしてたまにギアチェンジをする左手を触っては怒られていた。これからはユウ君と二人で生活していけるという事に少し酔いしれていた。そして私に睡魔が襲い掛かる。でも仕方が無い事なのだ。これほど一緒にいて安心できる人はいなかったのだから。

ふと目が覚める。

車の中で私一人になっている事に気が付いた。私はいつの間にか寝ていた様だ。車内は暖房が利いていて暖かく少しばかりうるさいエンジン音と振動だけが私の中に入ってくる。外の吹雪も先ほどよりは収まりつつあって今止まっている場所がコンビニだという事が解った。

自然と私の目がユウ君の姿を探す。「タバコでも買っているのかな？」と思いつつコンビニの店内に目をやった。レジにそれっぽいものを見つけた。その人はお会計を済まし駆け足でコンビニから出てきた。その人がユウ君である事は自動ドア付近で完璧に判明した。

その時だった。

外に出た瞬間にユウ君は転んでしまった。それはアニメのように豪快に宙を舞ったのだ。そして背中から落ちた。

私は思わず吹いてしまった。

「ハハッ！」

車内で私の笑い声だけが留まる。

背中を打ったにも関わらずユウ君はすぐに起き上がって私の存在に気が付いた。



何やらこつちに向かつて言っているが窓が閉まっている為聞き取れない。また駆け足で車の中に入ってきた。

「何笑ってるのさ！」

ユウ君も笑いながら少し照れくさそうに言ってきた。

「ユウ君、今宙に舞っていたよ！」

「うるさいね！大丈夫の一言もないの？！」

「あつ、ゴメンゴメン。大丈夫？」

「雪が積もっていたからね、意外と痛くなかったよ」

兎に角、私は可笑しすぎて暫く笑いが止まらなかった。

「で、何買ったの？」

「カシスオレンジとタバコだよ。今日は有希が退院した記念日だから夜祝おうと思ってね」

その言葉は嬉しかったがまだ笑いが止まらない。

「笑いすぎだから。もう！」

「私お酒あまり飲めないよ。医者に控えるように言われたから」

「知ってるよ。でも一口だけでも飲んでね」

「解ったよー」

やっと笑いも収まってきた。

「それとHも暫く出来ないからね！」

「知ってます！」

ユウ君はタバコだけ取ってカシスオレンジの入った袋を私に渡してきた。

「そうだ！退院記念日にプリクラを取りに行こう！」

「え？！有希のお父さん達、家で待ってるんでしょ？大丈夫？」

「大丈夫！気にしないの！」

私はとつてもワガママだからユウ君はプリクラを取りに行かざるを得なかったのだ。

「お父さん達が勝手に私の家に行ってるんだから関係ないよ」  
私はそう言い放ち少しだけ寄り道をする事にしたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3216d/>

---

雪のように

2010年10月10日21時41分発行